



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし2 : 宮城県石巻市北上町の女性たち
Author(s)	平川, 全機; 武中, 桂; 庄司, 知恵子
Citation	【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし2 : 宮城県石巻市北上町の女性たち, 1-64
Issue Date	2014-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81602
Type	book
File Information	kitakami2.pdf



【聞き書き】

北上川河口地域の人と暮らし 2

宮城県石巻市北上町の女性たち

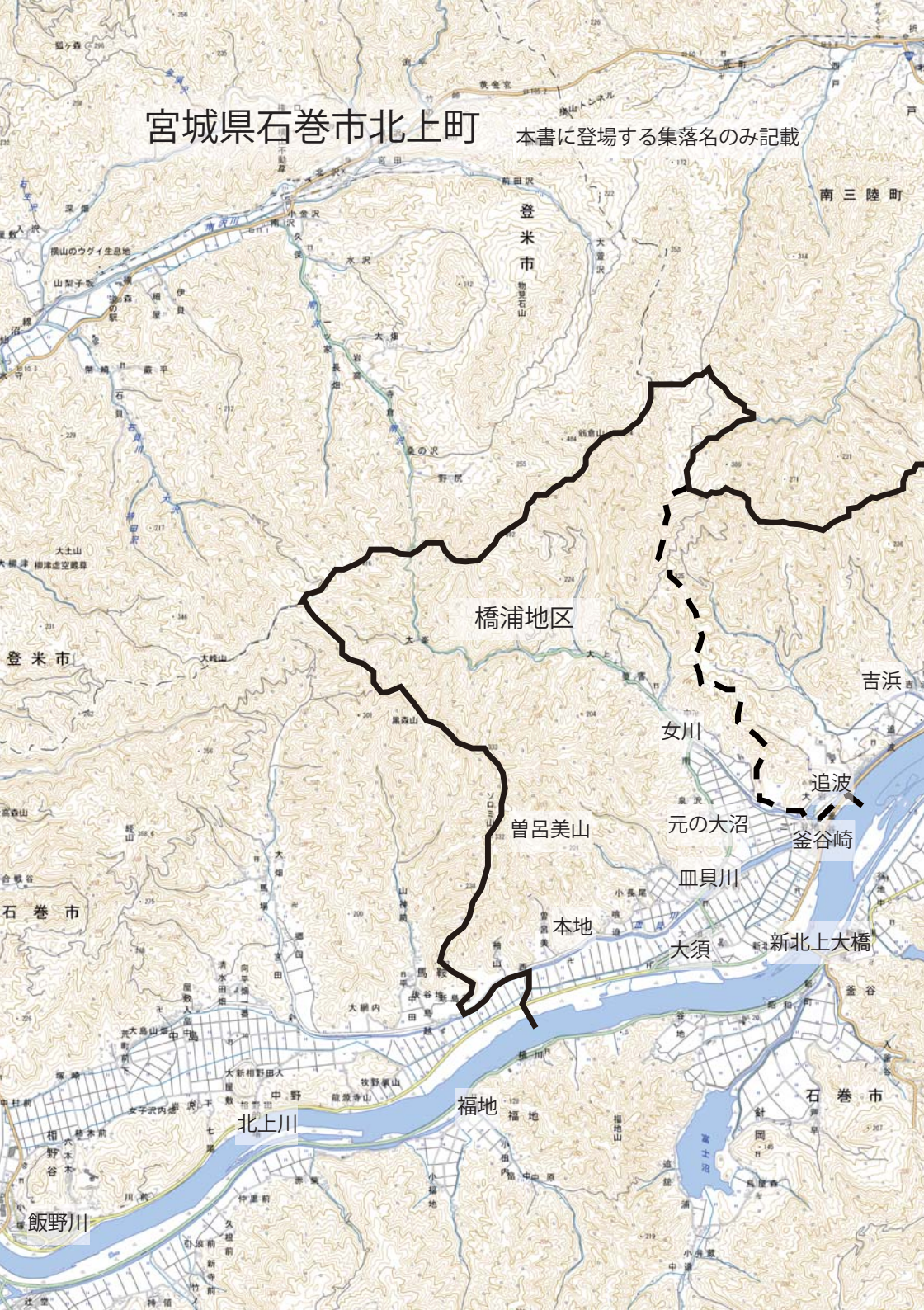
北上川河口地域研究グループ編



平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震対策用図（登米）および（大須）を使用して作成。

宮城県石巻市北上町

本書に登場する集落名のみ記載



はじめに

私たちが初めて北上町を訪れたのは2004年2月のことです。それから概ね1年に2回ずつ北上町を訪れてきました。環境社会学、地域社会学を専門とする私たちは、毎回インタビューや史料の収集に努め、地域のみなさまにいろいろなお話を伺うことで、ヨシ、漁業、農業、炭焼き、養蚕、遊びなど、地域社会と自然環境との多様なかわりについて学ぶことができました。もちろん、初めて聞くお話も多く、毎回どのお話も大変興味深く聞かせていただいております。

2011年3月11日の東日本大震災以降も、私たちはいろいろな形で北上町、地域のみなさまとのかかわりを持たせていただいております。この冊子では、震災以前からの聞き取り調査のデータを多く使用しておりますが、発行に際しては震災以降にも何度も繰り返し貴重なお時間をとっていただき、さまざまなお話をさせていただきました。「北上町での暮らし」についてお話を聞かせていただくなかで、北上町外で生まれ育ち暮らしている私たちは、それまで知らなかったことを地域のみなさまからたくさん教えていただきました。また、みなさまとお話させていただいていると、「知っているつもりでいたこと」が必ずしもその通りではない、と気付かされることもしばしばです。この冊子で取り上げる「女性の暮らし」というテーマについても同様です。

当初は男性のみなさまからお話をうかがうことが多かったのですが、回数を重ねるうちに女性のみなさまとお話しさせていただく機会も増えてきました。同じ地域内の暮らしであっても、必ずしも男性の生活ぶりと同じではなく女性独自の生活観があること、同じ北上町内といっても集落によって、いろいろな場面によって違いがみられること次第にわかりました。なかでも私たちが初めて知り、非

常に関心を持ち、何度も何度も繰り返しお話を聞かせていただいたのが「観音講」です。男性の「契約講」とは異なり、また集落ごとにその運営や規則も様々な女性集団「観音講」について、女性のみならず、かつての北上町における「女性の暮らし」について描き出すことを試んでいます。過去と現在とは女性たちのライフスタイルも様変わりしています。集団移転等によって新しいコミュニティが創られようとしている現在、「過去に戻す」ということではなく、新しいコミュニティを作っていく際の参考資料となればと思います。

ご笑読いただきながら、この冊子が地域のみなさまのお役に立てば幸いです。

武中 桂

はじめに

4

大槻トヨさん

「女の人だって、何でもやっただよ」

10

千葉みや子さん

「観音講は、とっても厳しかったの！（笑）」

18

鈴木昭子さん

「追波で自分のお店を持って、夢がかなったの」

30

千葉よしのさん

「うーんと働いたの。雨が降っても、いつも働いてたの」

42

千葉輝子さん

「保母さんになろうと思って一生懸命勉強したのに…」

役場に就職しました！」

52

コラム 集落における女性の組織―観音講と念仏講

58

あとがき

62

宮城県石巻市北上町の女性たち

「女の人だって、 何でもやったんだよ」



昭和12年（1935）樺太生まれ。本地集落で育ち、追波集落
在住。10人きょうだいの6番目として生まれ育ったトヨさんは、
幼い頃に樺太から一家で引き上げて、本家である実家がある北
上町本地集落へと戻った。まもなくして母親が亡くなったため、
以降はトヨさんが一家の「母親代わり」を一生懸命務めた。そ
の頃には土方の仕事をしたこともある。結婚を機に追波集落で
の暮らしを始めてからは、姑たちに実娘のように可愛がられ、
一緒に山に行ったり川で魚を獲ったりしていた。

■ 樺太から北上町本地集落へ

トヨさんは樺太で生まれたが、小学校4年生のときに引き上げて本家である実家がある
本地集落へと引っ越して来た。「別家（分家）の人たちが、私たちの実家に入ってたのね。
だから、別家の人も10人、私たちも10人、しばらくは20人も一緒だったの」と、大人数で

一緒に暮らしていたこともある。まもなく、母親が42歳で亡くなった。

すぐに家の手伝いしてね。母親が42歳で亡くなったのね、引き上げてきてまもなく、小学校4年生のときに亡くなったの。昔だから、お産で亡くなったのね。だから、うーんとしんどかったのね、気苦労。お母さんも亡くなってるからさ、田んぼとか土方とか何でもしたんだよ。木の箱を背負わせられて、そいつに土入れられるわけよ。それを背負って運んで、着いたら、ヒモをこう引つ張つたらパカつと口が開いて、土がみんな落ちるんだよ。そいつでまた行つて。そういう仕事させられたの。h 本地の実家の方でね。田んぼの作業でね。他には何にも仕事ないし、女の人たちみんなやってたよ。他にも、モンキツキつて、杭刺し。橋なんかを作るときの柱を埋めるわけよ、今は機械だけどね。みんなしてヨイドンつてやってね、丸太を持ち上げるために綱引つ張つて、後はドンつて杭が刺さつていくわけよ。そういう仕事しかないんだもんね。

さらに自分より年上の姉2人はすでに結婚し、家を出ていたため、以降トヨさんが「母親代わり」となった。

ずっと牛飼つてたからね、朝晩は乳搾りもやったの。そして、朝に自転車で農協まで牛乳積んで、毎朝届けたの。その頃はまだ車で集めに来たりしないからね。毎朝やらせられたんだよ。一斗缶¹だもの、1つしか持つて行けないんだよ。今は道路良いけども、昔は砂利道だつちゃ。

私の一番大きい兄貴が人工授精をやつて、石巻市内まで朝に自転車で、その種を買いに行かされたりもしたんだよ。だから、今腰が悪くなったんだべよ（笑）。その頃車がないからさ、自転車で朝

¹ 一斗は約18リットル。

の暗い内から。1時間はかかるさね。道路はデコボコデコボコだしさ。苦勞したんだよ、一番大変な時期だったね。

■結婚、追波集落へ

昭和35年、24歳のときにトヨさんは結婚し、追波集落へと嫁いだ。その当時のことを「大変だったのよお」と振り返る。

お姑さんが3人いたのが、一番大変だったね。おっぴさん（姑の母親）とおばあさん（姑）とおばちゃん（義理の叔母）っていう人もいたのね。みんな旦那さん亡くなつて、女の人ばかり3人残つてね。一層氣をつかうことばかりだもんね。お姑さん3人のところで一緒にご飯を食べるんだから別になんだかんと言われてひどいってことは何もなかったのね、ただ自分の氣苦勞が絶えなかっただけ。お風呂も沸かして、湯加減を見て、お風呂は入ってくださいって言つて、背中さ全部流したの、3人全部。昔はみんなそうやってたつたのよ、今じゃ信じられないけどね。

しかし、「3人おばあさんたち（お姑さんたち）いたけども、厳しいことはなかったね」と3人の姑たちとの關係を振り返る。トヨさんは男の子を3人もうけたが、「おばあさんも、男の子ばかりなのね、子ども。私はお姑さんに本当の娘みたいに接してもらつて、結構楽しかったのね」「おばあさんたちは、みんな良い人だった。嫁と姑というのは本当にひどいと聞くことも多いんだけど、私はそんなにひどいと思わなかったよ」と、トヨさんは語る。とは言え、もちろん嫁としての仕事は他の家と同じようにあり、きついものであつ



釣石神社前から見た追
波集落の風景

2006年2月撮影

た。ただし、それは姑たちとの関係というよりは、当時の生活状況によるものであった。

嫁さ来たときは、田んぼさ行くったって、歩いてだからね。大須^{おおす}の田んぼまで歩いたの。みんなでゾロゾロゾロゾロ歩いてね、大須までだから30分はかったよね。

毎日、山さ、おばあさんに連れて行かれて、木を切って、炭焼きをしたの。毎日だよ。（結婚後）3年は子どもいなかったから、毎日山さ行って、ノコギリで木を切って、帰りは荷物を背負わされて帰って来たの。おばあさんが、炭の釜に入ってさ。

炭焼きが無くなってからは、土方とかね、お金取りやらされたのさ。その頃は一輪車で土運んだりなんだりして、雄勝^{おがつ}町の方でね。今みたいに橋（新北大橋）がないから、飯野^{いいのかわ}川回りして、雄勝までマイクロバスが迎えに来たのね。そうして毎日通ったの。給料もらったのね。家にはおばあさんたちいるから、（私は）家にいられないから、結局働きに行かねばならないから。あとの人たちは水産加工場さ

行ったり、いろいろあつたもんね。加工場なんかは、私は行かなかったね。行った人もあるけどね。

それから、追波にあつた製材所で働いたのさ。昭和60年（1985）頃、火事になって辞めたんだ。それから、また別の製材所に勤めたの。それも潰れたから辞めたの（笑）。でも10年ぐらゐは勤めたかな、平成8年（1996）ぐらゐまでかな。釜谷崎^{かまやざき}と追波の間にあつたのね。

■ 追波集落の観音講

トヨさんは結婚を機に、追波集落の観音講²に入った。

昔は大変だったんだよ。必ず着物着て。朝に着て、今度夜はまた別な着物に必ず取り替えていかなきゃいけないの。夜まで、ご飯食べるの。朝は袂^{たもと}（一般的な着物）を着て行つて。1回帰つて、家族のみんなのお支度をして、夜はまた別な着物、元禄（元禄袖の着物）に着替えてまた行くの。

追波集落では、集落内の公民館で観音講を行う。

観音講は、うんと厳しかったの。必ずトシダカさん（年長者）ところさ行つて、暇もらわなきゃ、ただ勝手に立つて歩かれなかったんだもの。ハツデキ（初めて出席する人）、歌つこ歌わせられるわけ。それが嫌で、やつぱ入りたくないってなつてね。

しかし、厳しさの反面で「楽しさ」も感じていた。

² 集落の嫁が年2回ほど集まり、安産祈願や会食を行う女性の組織。



追波公民館

2007年8月撮影

その時は、どこさも遊びに出て行かないっちゃ。
出歩くってことないから、それが結局みんなとお話
しできるから、楽しみ。厳しいけれども、まず楽し
みつつか、みんなしてご飯も食べるんだものね。
他には何も楽しみねえんだもんね。おらたちお嫁さ
んになったあたりは、観音講さ行くのは楽しみだか
ら。みんなと会ってお話したりするっちゃ、夜まで
だっちゃ。

普段の生活においては「嫁」としての仕事
に追われていたり、常に「おばあさん」と一
緒だったりというように、言わば「自由が
ない」日常だったため、たとえ厳しくても
「家」から離れることができる観音講の日は、
ある意味では貴重な楽しい時間であった。

観音講には原則として子どもを連れて行く
ことはできないが、乳幼児のうちはやむを得
ず連れて行ったこともある。ただし、その場
合でも服装には厳しかった。

赤ちゃんのうちは、みんな連れて行ったの。全部おんぶして行った。泣くと、ちゃんとすぐに廊下さ出て、泣き止ませて。(泣き止んだら)それからまた戻ってね。子どもを連れて行くのに、寒くてもネンネコ²は着られない。

■ 観音講を「アガリ」、念仏講に入る

トヨさんも45歳で観音講を「アガッタ」。そして、その後念仏講に入った。観音講が山の神様を祀る日であるのに対して、念仏講はご先祖様を供養する日である。観音講が一家から1名であつたように、念仏講も一家から1名女性が出ることになっている。念仏講も1年に2回、3月と9月のお彼岸のときに行う。集落の公民館に集まって、みんなで数珠を33回まわす。それを3回行う。その後、ホテルなどに移動してみんなで歌や踊りをしながら宴を楽しむ。

ある程度の年齢になってから、いろんな歌とか踊りとか自分の得意を出せるような形でね。それは嫌がらないで、みんな楽しく。本当はご先祖様の供養なんだけど、でも結構楽しくね。

観音講は東日本大震災以降行われていないが、念仏講は「震災後にもやったんだよ」。

震災後はお墓の前でやつたり、お盆にもちよつとやつたり、につこり団地の集会所でやつたりね。今年(平成26年)の春はお弁当を取ってみようってことで。(震災後の生活で集落の)外に行っている人も来て、みんなで集会所でお茶飲みながら、ゆっくり話をしながらね。

³ 子どもを背中に背負ったまま着る防寒用のはんてんのこと。

構成／武中桂

千葉みや子さん

「観音講は、

とっても厳しかったの！(笑)」



昭和24年（1949）月浜集落生まれ、月浜集落在住。吉浜小学校、月浜中学校を卒業後、地元の高校に進学。卒業後、月浜集落内の男性と結婚した。生まれてからずっと月浜集落で暮らしているみやさんは、地域のことに詳しく、なかでも集落の女性が参加する集団である「観音講」「念仏講」に詳しい。

■ 19歳で結婚、観音講に入る

みやさんは19歳で結婚し、集落の他の女性たちと同じく結婚と同時に観音講に入った。観音講は一家から女性が1人出る必要があり「嫁さんもらえば、私は引退して、長男の嫁が出るって感じ」というように、跡継ぎ世代が結婚すると、その世代に参加が譲られる。その意味で「若い人ね」というように、嫁世代の女性の間となっている。

観音講は安産祈願の場である。安産お守りとして「オマクラ」というものがある。

妊娠して、春と秋2回、2月と11月に行ってたけど。もしほら、10月頃の出産予定だったら、その前にか。赤いおはじきの大きいみたいなのがあるのね。オマクラって言って、それを1個お寺（長観寺）¹から借りて、お産するときは枕元において。産後は、1個自分でまた作って、2個にして返したの。結び目はきっちり結ばないで、ゆるく。安産の意味を込めて、きっちり結ばないの。片方はきっちりでもいいんだけど、片方はゆるやかに。観音講に行くときに持って行って、お寺に返すのね。

みや子さんも他の女性たちと同様に、観音講に対しては「厳しかった」「嫌だった」という印象が強い。初めて参加する「ハツデキ」のときは、「歌を歌わなければならぬ」というあたりからも「責められている」「いじめみたい」という印象が強かった。観音講の場合は、「礼儀作法を教わる場」という理解をしているが、どうしても厳しさばかりが印象として残る。

（年齢が）上の人たちは、ジロジロ見てるんだもんね。上から下まで、ジローつと見られるんだもん。嫌な思い出、本当すごいんだよ。上の人たち、ずっと見てんだもん。足は崩されないしね。

月浜集落生まれで現在も月浜集落に住んでいるみやさんは、もともと義姉が参加する観音講の様子から、「観音講＝厳しいもの」ということは知っていた。しかし、いざ自分がその立場となると、厳しさを身にしみて感じるようになる。

1 月浜集落にあるお寺。



長観寺から見た月浜集落
2006年2月撮影

知ってはいたから、そういうようなもんだと思つて育つてはいるんだけど、だけど行つてみればね（笑）。頭下げてトイレ、また帰つてきて頭下げて座るだっちゃ。何するのにも必ず正座して上の方（上座）にトシダカさん（年長者）がいるからね。子どもの頃は、観音講自体は分かつてたけど、参加はしないから。そんなに厳しいつてのはね、その現場を見ないからさ、分からないのね。

欠席に関しても、容易ではない。

本当に身内で不幸あつたとか、そういうとき以外はね（休むことが許されているわけではなかった）。すごく厳しくて、何か理由つけてどっかに行かなければならないつて、トシダカさんにお願ひするんだけど、その意味合いをちゃんとはつきりしないといけないのね。今日はどういう用事があつて、お暇をいただきますつて。トシダカさんも、それを（他の参加者に対して）お願いしなければいけないの。

しかし、なかには「いつも行かない人」もいる。

「いつも嫌だ嫌だって欠席する人がいるわけさ（笑）。だから、トシダカさんも（他の参加者に向けては）いろいろな嘘を言って、休ませてくたさいって言うの（笑）。だけど、みんなわかってるから、「また始まった！」とか言うわけ（笑）。

観音講は年2回行われていた。日にちは2月16日と11月16日であった。参加者は、丸一日を観音講に費やす。午前と夕方では別々の着物を着ていかなければならなかった。「それが本当に苦痛だったの」と語る。たとえ妊娠中であっても洋服での参加は認められず、「お腹大きくしてても参加でしょ。着物着て行かなきゃならないの」と語る。また夜には、「元禄っこ（元禄袖の着物）」を着て出かけた。

■ 観音講の料理

観音講では、集団飲食を伴う。その準備は組（集落内で何班かに分かれており、それぞれの班を「組」と呼ぶ）ごとに当番制で行われており、その当番を「テエマエ」と呼ぶ。お膳に並ぶお皿の中身は毎回決まっているが、「組によつて味が違う」というようなことはあった。そして、その際に使用するお皿などは、すべて観音講できちんと管理していた。

ちゃんと帳面があつて、借りたいときはちゃんとその人に立ち会いしてもらつて、これは何個ね、

これは何個ねって。それで返すときも、そうやって厳しく管理はしたの。もし壊したり何かしたら、合計数をちゃんと書き直してね。壊したからって（現物で）弁償ではなくて、違うのよこされても困るから、お金でね。

月浜集落の食器の管理は、他の集落と比べると、「財産」としてしっかり管理されていた。必要や希望があれば集落内の冠婚葬祭時に貸出も行った。月浜集落では「座布団」も観音講で管理していた。道具や座布団は半年ごとにテエマエで管理をし、ほつれている箇所などがあれば1年間預かったテエマエがきちんと繕い、観音講が行われる前夜に次のテエマエへと「戸渡し」する。

観音講の料理は精進料理が基本である。

お精進料理だから、本当にみそ汁とご飯、それにサラっというのが油揚げとこんにゃくのクルミ和え、クルミ豆腐、それにお漬け物かなあ。みんな畑とかいっぱい作ってるから、まずそれ持ち寄ってってやったんだね。

毎回、準備する料理の献立は決まっていた。クルミ豆腐がつくようになったのは、わりと最近の話である。テエマエに当たっている組の女性たちは前日より準備をした。お膳の準備のほか、座布団にカバーをかけたり、ゴザを敷いたりする作業があった。

月浜集落の観音講は「お寺さんに上がる」というように、前日には、お寺で拝み、杯でお酒を飲んだ。

（観音講の）前の日15日にお寺に行つて、拝んでもらうんです、和尚さんに。

それで、16日の朝にお寺に行つて、そして、オボキつていつて、テエマエの人たちが箸で、お椀にご飯ギチギチいっぱい、ほら何十人分だっちゃ、てんこ盛りにしてね。それをね、みんなで年の順番に手にもらつて、食べる。安産祈願つて言うか、そういう意味合いなんだろうね。

その後、お寺から下がつて、公民館さ行つて、公民館でちゃんとしたご飯いただいて、また、解散したんです、私が嫁に行った頃は。そして、また着物着替えて、また夜行くんですよ。3回あるんです。前の晩と16日の朝膳と夜の膳と。

■ 観音講の決まりと変化

子育て世代が参加する観音講ではあるが、基本的には子どもは、姑や夫、近所のお年寄りに預けて参加していた。

昼間は子どもを連れて行けないんだけど、夜のときは、おんぶして連れて行つてもよくて。本当に母乳が必要な赤ちゃんだけ連れて行つてね。子どもと一緒に行くような場所ではないもんね。（乳児だけは）おんぶして、後は陰に行つて母乳飲ませるとか。連れて行くのは、そういう子どもだけだね。

観音講では「ツナギ」と呼ばれるお金を徴収していた。

観音講は観音講で、ツナギって個人から集めるの。ハツデキつて観音講に新しく入る人は、ご祝儀

持ってくるんだよ。それはちゃんと、観音講の通帳があつて、そこに入れるのね。反対に欲しいものがあれば、そこから出して使うっていうのだね。

「ツナギ」とは、いわゆる当日の「会費・お膳代」である。各家々では姑が嫁に渡す形であつたが、みや子さんの場合は姑がいなかったなので、自分で用意をしていた。会計はデエマエのトシダ力が担当しており、お金の管理はきちんと行なわれていた。「大きなもの」を購入するときは、契約講にお願いしたりもした。

月浜集落では数えの50歳になったときに観音講を「アガル」。みや子さん自身がトシダ力になった頃には、だんだんと観音講の雰囲気も変わってきて、「何をするのにも必ず正座」というのではなく、「お話ししながらゴロつと寝転がつたり」できる雰囲気にもなってきたという。料理についても、次第に簡素化されていった。

夜はだんだんに寿司取つて食べたつちや(笑)。面倒くさいからやめにしましうつて話になつてね。ほら、昼と夜と同じだから(代わり映えのしない料理になつてしまうから)やめましうつてことになつてね(笑)。

震災後、月浜集落では観音講は行われていない。

震災後は全然だね。震災前だつてね、遠くに行った人は来なくなつたしね。ハツデキつて最初、嫁いで初めてのときに挨拶しないからつて、あとそのまんま出ない人もいるし。1回ハツデキをしても、

遠くに住んでれば、トシダカの人にお暇いただいてもらってね。だけど、だんだん出ていなくてもいいっていう感じになってきたからねえ。自然になってるんだよね、生活の場が仙台とか石巻とかって行ってしまうから、なかなかね。

自分たちよりも若い世代の人たちにおいては、震災前から「参加しないこと」が当たり前になってきている。みやさんが参加していたときは、月浜集落に住んでいなくても長男の嫁である人は、集落以外からでも参加していた。

（来ないことが）当たり前みたいになってるよね。今の人は断るよ。今はもう入りたくなければ、入らないんだもん。昔は、家を出て石巻なんかで所帯持ってても、そのときは必ず帰って来てね。

それに、今の人は行きたくないってはっきり言うんだよね。たとえば私らのときは、嫌だなあって思ってもね、着物を着て行くわけさ。朝に行くときも、ちゃんと着物を来て、1日2回行くから夕方また4時からのときは別の着物を着なきゃいけないのよ。それが本当に苦痛だったの、着たくねえって。着物も一人でまともに着られないのにさ。今なんか、自分が嫌だと思ってたのもあるから、来ないって言われても、んだべなあって思うんだ。自分が嫌だったから（笑）。

■ 観音講と念仏講

他の集落同様に、月浜集落でも観音講を「アガツタ」女性たちは念仏講に入る。念仏講は春と秋のお彼岸に、それまでに亡くなった人たちの霊をみんなで弔うという意味があり、参加者全員で鐘に合わせて数珠をまわす。例年、毎年1月16日と8月16日にもお念仏を拝

む。原則として「観音講をアガツタ女性」姑世代」が入るが、その家に姑がいなかった場合や念仏講に参加できる人手がない場合などには「観音講にも出たし、念仏講にも出たし」ということになる。みや子さんも姑がいなかったたので、若い頃から念仏講にも参加していた。月浜集落の場合、念仏講は75歳でアガルことになっている。念仏講は「仏さん（仏壇）があれば必ず出る」ということになっており、先祖代々の仏様を集落全体で弔う場でもある。その年に家族の誰かが亡くなった家では、3000円を払って、念仏講でお念仏を唱えてもらう。このお金は念仏講で管理し積み立てられており、念仏講で「大きなもの」を購入する際に使った。念仏講でも、みんなで食事をする時間があつたが、観音講のときほどの準備は必要なく、ツナギとして各自から350円を集金し、うどんなど簡単なものを準備していた。近年は、各自から1000円を集金し、お膳を取るようになった。

念仏講も、なんか観音講と同じ感じだよ。メンバーはだいたい同じで。念仏講は年齢制限なかったから、いつまでも身体が続く限り行ってたんだけど、だんだん年とってきて、テエマエに出るのがあれだからってことで75歳とかって年齢制限つけたりしたんだね。その前は、本当に観音講と同じようにやってたんだよ、お辞儀して何してって。秋なんか薄い（薄手の着物）ないから元禄っていう袖の着物着て行ったら、ダメだって言われて、家に帰って取り替えて来たりね。観音講と同じさ。

このように、みや子さんは念仏講の厳しさについても話すが、家に帰ってから姑に気をつかわなければならない嫁世代の頃とは違って、姑世代にとっては必ずしも緊張感を伴う場ではなく、息抜きの場であつた。お酒を飲んで酔っ払う人たちが沢山いたという話もある。



長観寺

2006年2月撮影

月浜集落では、東日本大震災以後、観音講は行われていない。しかし、念仏講は行われている。

月浜では、被災後もやってるよ。うちの方はお寺流されなかったから、お寺だね。（震災で）50人も60人も亡くなったから、1つだけお念仏を唱えてね。震災の後初めてやったときは7人だか8人だかしはいなくて、鐘叩く人と太鼓叩く人と2人いるんだけど、数珠まわす人が少なくてね。だから、男の人でもいいからって、いる人たちに回してもらって、お念仏してね。最近では11人だか12人。

震災以降も念仏講が行われているのは、「亡くなった人のために、お念仏をあげる」ためである。それもあって、女性に限定されていた念仏講に男性の参加も受け入れている。

■変化に感じる寂しさ

自分たちの時代には、「厳しい」ものだった観音講や念仏講に対して、「女性の生活の変化」に焦点を当てて、みや子さんは次のように語る。

私の子どもたちの時代になれば、安産祈願なんていうのは関係なかったかもよ。だって、本当のうちの方でも、仕事に行って、昼間だけの仕事ではないから、午後からの仕事もあるから思ったもんね。1年で（観音講の日取りは）決まってるのに、なんでかなあって。それなのに欠席する人があったから、思うこともあったけど、口には出さないでね（笑）。

女の人も、外に仕事、電気会社とかいるんな仕事を持つようになってからはね、（観音講に）参加できまんって言うのもあって、そいつで年配の人たちも諦めたんだよ。最初は、観音講さ出ないってどういうことだって非難ごうごうだったわけ。あんなうるさいお姑さんの嫁さんが来ないって。うんとうるさかったの。けども、嫁さんに行かないって言われれば、自分の嫁には何とも言えないから、だんだんにね。すぐくおっかなかった人でも、自分の嫁さんには何とも言えなかったみたいで、「ええー！？そんなもんかい」と思ってたさ（笑）。

よく考えれば、寂しく思うところもあるんじゃないですか。行ける限りは行きたいと思うんだけどね、（念仏講は）75歳までなんだけとさ。

構成／武中桂・庄司知恵子

鈴木昭子さん
すずきあきこ

「追波^{おつば}で

自分のお店を持って、

夢がかったの」



■ 何でもが遊びになった子どもの頃

長塩谷集落に暮らす子どもたちは、吉浜よこはま小学校に通っていた。吉浜小学校は、昭子さんたちが子どもの頃は長塩谷集落から3つ離れた吉浜集落にあったため、通学には時間が

昭和32年（1957）長塩谷集落生まれ、追波集落在住。「ま
ちの美容師」として地域の人に慕われている昭子さんは、幼い
頃から美容師になることが夢だった。夢をかなえるために、中
学校を卒業した後は北上町を出て上京し、専門学校に通った。
その後、石巻市での勤務を経て、結婚を機に北上町に戻り、追
波集落に自分のお店を開業した。震災でお店を失うも、震災後
にも訪ねてくる人びとに頼まれて美容師をしており、今後につ
いても「お店出すつもりでいます！」と張り切っている。

1 当時、吉浜小学校は
吉浜集落に校舎があっ
た。その後、月浜集落
に移転した。平成25年
（2013）に北上町内
の橋浦小学校・相川小
校と合併して北上小
校となった。

かかった。

隣の白浜集落^{しらばま}には分校があつたのに、なんで分校に行けないのって思ったね。でも、年上のお兄さんが中学校までは自転車に乗ってくれてね、1年生のときは特に頻繁にね。どこにいても、みんなが妹のようにしてくれたの。

当時の長塩谷集落では、農閑期には父親は出稼ぎに出ることが多かった。そのため、子どもたちもいろいろなお手伝いをした。

牛乳を沢に持つて行つて、温かいのを冷やしたり。冷やし方が悪いと、赤い線を引かれて、線を引かれると金額がずーっと安くなつたの。

お風呂は、水道はあつたけど外にあつたから、庭でビー玉遊びしながら、お風呂に薪入れて沸かしておいたりね。ビー玉遊びしながら、3軒隣同士みんなでやってね、子どもたちがお風呂沸かしてたよね。

お風呂も木（薪）で沸かしてたから、木小屋に、雪降る前に薪をいっぱい貯めてね。いっぱいになるのが楽しみで、母親と山に行くときは子どもだけ置いて行けないからつて連れて行かれると、帰りは小さい薪の束を背負わされてね。山に行つて親たちが木を切つて、出して、いろいろしている間は遊んで、帰りに少しでもお手伝いつて背負わされて。それが朝行つてお昼に帰つて来るのと、また午後から行くのと、1日に2回ね。

家事ではお風呂を沸かすことを手伝ったり、また母親たちの山仕事に手伝いという名目でついて行き、そこで遊んだりもした。

小さい木の枝を拾ってき、自分の背負ってくる枯れ木を集めて遊んだよ。ウサギの糞を拾って「ダイヤモンドだ！」ってやったの。秋だとクリ拾いとかね。競争で取るのね。危ないからって言われても、ナタを持って行って、枯れ枝だけ拾えばいいんだけど、みんなが拾ってるからないんだもんね。だから、細い枝をナタで切ったりね。イチゴを採りに行くよって、みんなで山奥まで行って、隣の山で迷子みたくなったりね。

山以外でも遊んだ記憶はたくさんある。

沢で、友達同士で小さいエビとか小魚獲ったりして遊んでたね。結構獲れたんだよ。エビを茹でると真っ赤になっただけ。

小学校では運動会があつて、地区対抗部活リレーであつたので、6年生のお兄さんたちとかお姉さんたちが砂浜にグラウンドみたいに書いて、バトンの練習だとかやった記憶もありますね。

危険な場所っていうのは、私ら子どもときは、上の人たちと遊んでいた、「そこ危ないから、こういうことダメだよ」って。危険なところをすぐにこうやって上の人たちに教わって。それこそ山の散策とか。季節になると石を取りに行ったり、アケビの採れるときなんかアケビ山さ行くかって。でも、遠いから4年生以下の子は連れて行かない、女の子は連れて行かないっていう感じで。みんなが地域のみんなで育てたのが、私たちの子どもどものときのことだけ。

このように、子どもたち同士の交流を通して社会のルールのようなものを学ぶこともあった。

■美容師を目指し上京、東京での生活

月浜中学校を卒業した後、すぐに昭子さんは美容師を目指して上京し、東京で専門学校に通った。北上町から上京したときには「驚いたことがいっぱいありました」。

長塩谷で育って東京に出て行ってるから、その落差はその時点で感じてたね。反対に東京での生活の方が、便利すぎてびっくりしてね。東京に行ったときには驚いたことがいっぱいありましたよ。驚くってったって、仙台に出るまでだって大変だけど、バスだってそんなにないけど、東京には本当に地下鉄はある、何々線はあるって全部あって、行く方向によって何線利用しようって選べて。でも、すぐ自分1人でも歩けるようになったのね、歩かなきゃないって思ってた。片道連れて行ってもらったら、帰りは自分で歩かなきゃないなって。学校が代々木にあったのね。山手線の混雑にはびっくりしたね。（1つ前の駅の）新宿になったら、降り口の方に行つてないと降りられないのね。ラッシュにはびっくりだよね。

ところで、昭子さんが美容師を目指したきっかけは何だったのだろうか。

あんまりにも私のまわりに、美容師が多すぎたのかな。だから、母親には美容師になるなら床屋、理容師になれて怒られたけど、好きだったんですね。自分の子どもたちにはダメって言ったけど

（笑）。好きだったんですよ。お人形さんでも伸びてこないのにバサつとやっちゃったり、トウモロコシの毛を切つてたりね（笑）。憧れたのが、叔母のお店に行ったときに、小学校5年生だったかな。叔母も美容師だったんだけど、石巻市内の大きいお店で、みんな白衣着て、髪はアップにして、みんなキレーにしたたお店で待たされたときの憧れ。小学校5年生のときの記憶が、今でも鮮明に覚えてて、本当すぐキレーに見えたし、働いてるスタッフもね。そのインパクトが強かったんだよね。1年間待つてるから、高校に入りたくなったら1年以内に帰って来いって親には言われたけどね。勉強嫌いだっただね（笑）。でも昔、私たちの時代、シャンプーしだしたときには手が腫れる、石巻に帰ってきてても薬のメーカー変わっただけで本当に荒れて、何つけてもダメで、冬に皮膚科に行けば仕事辞めろつて言われたけど、私は何かあつたらずつとメンソレータム、あれが皮膚科の薬よりも利いたのね。手から血が吹く感じになったときもあつたけど、でもやっぱり好きだったんだね。

子どもの頃からの夢を実現するために、中学卒業と同時に上京を決めた昭子さんは、憧れの美容師を目指して東京で日々頑張り、見事美容師免許を取得し、専門学校（通信制）も卒業した。

■ 石巻市内での就職、結婚、北上町での開業

昭子さんは東京で5年間を過ごし、石巻市内の美容室で勤めた。これは予定外の就職であつたと笑いながら語る。

ちよつと体調を崩して、東京で休み取つて、どうしようかなあつて帰ってきてるうちに、なぜか

追波集落にあった「あきこ美容室」

鈴木昭子さん提供



石巻で美容師の就職決まっちゃって。石巻では大きな昔からの有名な美容室にすんなり。「いつから来れるの？」って喫茶店で面接って言われて、「ええー!？」って。でも、「私まだ東京の引っ越しもしてないんだけど」って言ったら、引っ越し費用はやるからって言われて、すぐに入ったんですよ。仕事してみたら、どうしても忙しいから休み取れないでくれてことで、そしたら最終的には、引っ越しは父親と母親でやってきたの。両親が2人して荷物を運んで来たわけですよ。ほんの少しお休み取って帰ってきたときに、ちよっと笑い話になってますけど(笑)。着付けなんかも教えてもらったし、お嫁さんにもついて歩いたから、そのあたりも完璧に覚えて。辞めないで欲しいって言われたけど、結婚でどうしても北上に戻ってこなきゃならないってことだね。でも、本当は引っこ込みたくなかったの(笑)。

そして昭和57年(1982)、結婚を機に北上町に戻った。その後、追波集落に昭子さ

んは自分のお店を構えた。自分のお店を切り盛りしながら、昭子さんは3人の子どもたちを育てた。

厳しいって言えば、私もまだ嫁の務めをした世代というか、もう少し下の世代になると、「えっ！？こんなこともできるんだ」って思うこともいっぱいあったけど、私は長女を生んでからすぐに開業したっていうことで、自宅で美容室をやってたし、おばあさんと長くかわる時間があつた分、お互いにぶつかることもあつたかもしれない。だけど、平日はずっと仕事してるから、休みしかおばあさんとずっと一緒ってのはないからね。日曜日でお店が休みだと、子ども連れておばあさんと一緒に出かけたりとかってしてたね。あんまりおばあさんと接する時間がないよりは、私は良かったね。近所のお母さんたち、おばあさんたちも、子どものこと見てくれるし、地域で子育てしてくれるとこつてのは本当、最高でしたね。

大変なこともあったけど、私は娘3人なんですよ。だから、子どもたち大きくなってからは、子どもたちが結構動いてくれたし、その点はすごく良かったかな。そして気ままな美容室だったからね、子どもの習い事で店閉めて歩いたりね（笑）。でも、田舎だからできたことも分かんないけど、お客さんの方も何曜日と何曜日の夕方はやってないっていうのは分かってくれてきたからね。普通の勤めだったら子どもたちに習い事をさせることはできなかったけど、子どもたちに自由にしたいことをさせられたってこともあるしね。

■ 親言講の「思ひ出」

結婚を機に北上町へと戻った昭子さんであるが、「なんとなく地元で見てても、嫁って

いうものにはギリギリまでなりたくなかったんだね（笑）。その理由のひとつに、昭子さんは笑いながら「観音講」を挙げる。同じ集落の大槻トヨさんらの時代²には、初めて観音講に参加するハツデキさんは、必ずみんなの前で1曲披露しなければならなかった。しかし、昭子さんの時代には歌を歌わなくてもよくなった。ただ、初めて参加するときの緊張感は変わらなかった。

2 本書10～17ページ。

隣の人と何をお話ししていたのかなあつて緊張感があって、本当1回目は苦痛の一日だったね（笑）。もう厳しいって言うか、頭下げてつて習慣は残ってました。トイレに行くときは、一番年上の人に頭下げて、トイレから帰って来てもまた頭下げて、自分の席に着くつていうね。礼儀みたいなものなんだろうけど。私たちが入ったときは、出席も厳しくて休めなかったです。

観音講は、安産祈願を行う場である。みんなでご祈禱する山の神様の掛け軸には、観音様が赤ちゃんを抱いている様子が描かれていた。山の神様の掛け軸の前には、お神酒とお膳をお供えする。

お膳は、お腹の大きい人、妊娠中のお嫁さんに「健康のために食べなさい」つてことで食べさせるの。妊婦さんがいないときは、これから可能性のあるお嫁さんにね。そのお膳も1個じゃないんだよね、3個くらいあげるの。

出産が近づくと、女性たちは神社から「オマクラ」を借りる。

オマクラって、お手玉みたいなのがあって。オマクラを1個借りてくるんです。そして、神棚に、日の良い日にね、戌の日に神棚にお供えするの。なるべく軽いやつを選ぶのよね、お産が軽く済むように、軽いの借りなさいって。オマクラには、赤と白があるの。借りるときには1個借りて、返すときには2個作って、3個にして返すんです。白を借りたら、赤を縫って返したりね。お礼つつうことで、（子どもが生まれることによって集落に人が）1人増えてくからね。

観音講で必要なお膳代は、出かける際に姑から小遣いとしてもらうのが一般的であったが、美容室を経営していた昭子さんは、そのお膳代も自分で払っていた。当時はお膳代他に「入ったときは500円ぐらいだっちゃ、私も500円が入って、アガル（引退する）ときは1000円」というように「ハツデキ」のときと「アガル」ときには、観音講に対してご祝儀を出すことになっていた。

服装に関しても、着物着用での参加は義務づけられていた。

着物って決まってるね。私、26年前、11月にお腹が大きくて、それまでには例がなかったんだけど、臨月だから洋服でもいいよって言われてたけど、あまり目立たなかったから着物で行くって言ってたの。でもその前に、予定日より早く子ども生まれちゃったから、観音講の日は病院にいました（笑）。で、そこから年1回は、洋服になったんですよ。

また、「私らのときから、公民館も使わないで、移動だけになったんです」。

みんなでいろいろと決めて、トシダカさん（年長者）の意見も聞いて、どの辺が良い、近くが良いとか、少し遠くに行こうとかいう感じで。日帰りのときもあれば、みんなで1泊するときもあり、行き先には女川町、松島町、秋保温泉とかね。

しかし、次第に1泊することはなくなつた。

2月、3月の旅行が泊まりであるときに、「3月に旅行、一泊旅行をしよう。観音講でしよう」となつたら、行く人がいなかったんです。少なかつたんです。やっぱり、どうしてもほら、（子どもたちの）受験があるでしょ。だから、結構少なかつたんだよね。

従来、1年に2回行つていた観音講であるが、女性のライフスタイルの変化や、子どもを中心とした生活リズムの定着などを背景として追波集落では平成に入つた頃（1989）から1年に1回、11月に行うようになった。

追波集落の観音講は45歳までのため、昭子さんも45歳で引退した。昭子さん自身が最年長者の「トシダカ」になったとき、観音講で保有していた「座布団」に関して、それまでのルールを変更した。追波集落の観音講では、財産として座布団100枚を保有しており、集落内の人々が冠婚葬祭等が必要とした場合には有料で貸出し、その収入を観音講の財産として貯金していた。毎年集落内の上地区・下地区それぞれ1軒ずつが持ち回りで座布団50枚ずつを1年間預かつていた。その「当番制」に関して、昭子さんは同級生とふたりで「追波会（部落会）に寄付する」ことを提案した。

50枚の座布団を1年間預かるのも大変だし、借りるときにそのとき保管している家を探すのも大変だし、ということ、座布団の貯金があったから、その貯金で前からあった公民館の古い戸棚を直していただいて、座布団100枚が入る棚を作ってもらってね。観音講の人たちはみんな、座布団が来ないと気が楽だって。

昭子さんたちの提案は全員に受け入れられ、それが実現した。ただし、東日本大震災以降、追波集落では観音講は「自然解散」状態にある。これに対して昭子さんは「そういうのは、やっぱり残していきたい」と思っている。

構成／武中 桂

千葉^{ちば}よしのさん

「うーんと働いたの。

雨が降っても、

いっつも働いてたの」



昭和4年（1929）、河北町福地^{ふくじ}に生まれ、追波集落^{おつば}在住。
「菖蒲田^{しょうぶだ}のおばあさん」と愛称で地域の人びとに親しまれていたよしのさんは、何でも器用にこなす。若い頃から、田んぼに畑、ヨシ刈り、養蚕、山仕事…いろいろな仕事をしてきた。女学校などには進学せず、本人いわく「無学」であるが、読み書きは誰に教わることもなく自分自身で学んだ。「料理の上手な人」として有名であり、その料理の腕前には家族からも絶賛の声があがるほどである。

■ 追波集落に嫁ぐ

よしのさんは、昭和23年（1948）に結婚し、追波集落へと嫁いだ。昭和30年代以降、徐々にライフラインの整備は整ってきたが、水には特に苦労した。

一番ありがたかったのは水道だね。風呂なんか井戸から汲んでたのね。それをするのが、嫁としてお昼休みなんだよね。今では毎晩新規にお風呂に水を入れるけども、井戸で汲んでたときは、風呂のあたりの電気はね、あまりあかりが明るくないもんで、2晩くらい、悪くすると3晩くらい水を取り替えないでいるの。火炊くときは良いの、（汚れは）下に沈んでるから。湧かすと汚れが上ってくるんだ。入らないより良いので、入ったわけだ。だから水道が一番ありがたかったんだね、女の人はガスよりも水道が。

北上町に嫁いで来てから、よしのさんはいろいろな仕事をした。嫁いだ先の千葉家は、代々農家だということもあり、田畑の作業に加え、酪農もし、農閑期には山仕事を行った¹。そのなかでも、一番の生活の糧だったのは酪農である。

一番多いときで、昭和51年（1976）に畜舎建てて、Sさんと共同でやったの。50頭はいる牛舎なんだよ。増えて、増えて。12、13年一緒にやって。

というように、多くの家庭では庭先で1頭2頭、多くても3頭程度を飼育していた一方で、よしのさんの家では牛舎を建てて、多くの乳牛を飼育していた²。搾った乳は出荷していたが、その出荷には量的な枠（制限）が決まっているため、出荷できないものに関しては廃棄しなければならない。

牛乳、せっかく餌かけて育てたのに捨ててしまっただよ。残った牛乳は食紅を混ぜて下水さ投げる。

1 詳しくは『聞き書き』北上川河口地域の人と暮らし 宮城県石巻市北上町に生きる』（48～59ページ、夫である千葉信男さんの章）参照。

2 東日本大震災の津波により家屋が全壊してしまったため、現在はこの牛舎を改築し、夫の千葉信男さんと娘婿の千葉五郎さんが住まいとしている。



千葉家の牛舎前から望む追波集落
2005年8月撮影

るの。食紅入れないと、売られたりするからさ。別に飲めるけども、食紅で赤く染めると飲みにくくなる。

また田畑での作業に関しても、「機械が次々にいろいろ入ってきて」どんどん大規模に行うようになった。

苗作りからが5月の仕事。朝早く起きて、苗取りをして。田の草取りが、辛さが一番最高だね。稲伸びていて足に刺さるし、1株ずつ取っていかなきゃなんないの。うちでは養蚕もやってたから、田の草取り（の時期が）遅くなって、暑くなってくるから辛かったのね。

「種まき桜」って言って、何も知らなければ草木に聞けっという昔の言い伝えね。桜が咲けば、種撒いて、山藤咲けば野菜何でも撒いて。親たちに教えられたの。

というように、農繁期に入れば酪農に加

え、水田、畑の仕事に毎日明け暮れていた。さらに、11月から3月頃の農閑期には、「山仕事が大変だった」。

冬だって、それなりにね。山仕事あるもんね。11月から3月までの5ヶ月間っていうのは、誰か彼か山にいるからね。

山仕事のなかでも、炭焼きを行う男性（夫）の手伝いとして、炭焼き釜の中に木を入れる作業を女性が担っていた。毎朝8時過ぎにお弁当を持って山へと出かけ、帰宅は夕方遅くなる。1時間くらいかけて歩いて山仕事の場所まで行き、帰りには、家庭用の薪や枝木を背負って歩いた。「みんな弁当持って行くんだもん。雨とか雪が降らなければ、毎日行くんだよ」といった具合である。10キロほどを背負って帰ることも珍しくはなかった。

多くの女性が、石巻市内の水産加工場に勤めに出たりするなかで、「出稼ぎしないでいいように、何でもやったのさ。炭焼きやったり、養蚕やったり、牛乳やったりって。出稼ぎしないでやったのは、うちとあと何軒かだけだよね」というように、千葉家ではよしのさんのみならず、夫婦ともに外に働きに出ることはなく、その代わりにいろいろな仕事を行った。とにかく「忙しかった」日々の暮らしを、よしのさんは「自分を励まして、みんなを喜ばせながら」送っていた。

■雨が降っても稼いだ毎日

よしのさんたち夫婦は、毎日毎日仕事に忙しかった。

子どもたちには、私たちのような苦勞をさせたくねえなあ。屋根のあるところで生活させたいなあって。まず、不自由させたくねえからって、子どもには。おらたちはいくら雨が降っていようと、子どもが家にいるときに家にいることはまずなかったもん。いつも働いてたの。雨が降ったら降ったなりの仕事があつたんだもん。

自分たち夫婦は毎日朝から夜まで、雨が降っても仕事をして、子育ては父親に任せっぱなしだったとよしのさんは言う。子育てのなかで特に重視したことは、「子ども、孫に絶対に無学でいてもらいたくない」という点であり、その思いは人一倍強かった。

私は無学だから、私は昭和19年（1944）の（尋常小学校の）卒業生だから。それから3ヶ月、4ヶ月したら終戦のときだったから、勉強よりも稼がなくちゃならないの。兄貴たちはみんな兵隊に行ってるし、私の姉さんが農家して、高等科卒業するときに昭和19年だったからね。だから、無学なの。だから、子どもに働け働けって言ったことはないのよ。宿題終わったら、遊びに行ってもいいよって。帰ってきて、3回本読んだら、遊びに行つていいよって。でも、間違えたらもう1回最初からね、って。内職をしながら勉強を見てただけだね、毎日のことだから、私の方が頭に入ってきたって。1回読んだるときにつまずいたら、もう1回最初からやり直しさせるの。そして私ね、子どもが（小学校）6年生になるときに、国語辞典を買ってやったの。こいつが私の教科書だったの。子どもが次はここをやるな、っていうのが分かってるから、先に調べて覚えて、子どもが分かんないで尋ねられたら答えられないといけなから、先に覚えたの。だから、子どもたちはおらが無学だってことは知らなかったの（笑）。



千葉家

2007年8月撮影

■ よしのさんの時代の観音講

よしのさんも、結婚と同時に追波集落の観音講に入った。集落に公民館ができるよりも前、よしのさんたちの時代には地区の「大きな家（旧家）」で観音講をしていたこともある。「私たちが嫁いで来た頃は、大きな家だったの。もともとは公民館がなかったからね。大きい家っていうか、昔からの家っていうか」といった感じである。よしのさんの家でも、観音講を行ったことがある。そして、よしのさんの時代でも、「厳しい」イメージがあった。

トシダカさん（年長者）つてのがいて、トイレに行くときでも、そのトシダカさんに「いつてきます」って行かなきゃならなかったの、私たちの時代は。トシダカさんは、45歳で、一番早くお嫁さんになった人。年齢が低くても、先に結婚した人が観音講では先輩になるのね。座るのにも順番があつて、

上座下座あって、年齢順、誕生日順、結婚した順。だから、同じ30歳でも先に結婚した人が上。先に結婚しても、年上の人が嫁として入ってくるのね、その人は1回目は下座で食べても、2回目からはその年齢の人のところに入るの。新参者として1回やれば、あとはもう年の順に並ぶのね。

特に、「踊りを踊れとか、歌を歌えとかそれが辛かったね」。だが一方で、よしのさんの場合は連日、昼夜を問わず働いていたという事情もあり、「観音講つていうのが唯一の遊び場だった」というように息抜きの側面もある。

年に2回あるわけ。観音様つていうかさ、山の神様、お産の神様を拜むお祭りみたいなもんだね。普段一生懸命働いてるわけさ、休みつていうものないから。その日は朝から夜まで。初めは正装して行つて、観音様を拜んで、ご馳走をいただいて、歌や踊りで一日過ごして。一回家に帰って着替えて、夜もあるの。

と、「観音講の日だけはね、楽しく」過ごした。

■ デイサービス、老人クラブ、ボランティア：忙しい毎日

観音講、念仏講を「アガリ」、農業などの仕事でも第一線から退いたよしのさんは、ようやく「お茶飲み」をする時間を持てるようになった。そして、月1回のデイサービスに出かけるようになり、そこで「みんなが集まる」時間を楽しんでいる。

今現在だったらね、デイサービスとかでみんな集まるの。追分温泉³とか3カ所を順番に役場の車でまわるの。月に1回ね。だから3ヶ月に1回、同じところをまわるの。今はデイサービスが月1回の楽しみなの。

³ 北上町内にある旅館。

「デイサービスは「行きたい人が行く」「やめるのも自由だし、入ることも簡単に入れる」というように気軽に参加できる。保健師さんによる健康チェックを受けたり、参加者のみんなでお風呂に入ったり、体操をしたりゲームをしたり、一緒に食事をしたりといった内容で「おもしろい」。

また、よしのさんは老人クラブにも入っている。その活動のひとつに、「お弁当づくり」がある。

ボランティアだね。月に1回の食事サービス、旧北上町の人たちに配布するので100人ぐらいはあるの。持つて行くものは野菜とか、みんな持ち寄りなの。早く言えば、（各々自分の家で）野菜とか作っているものとか、うちでは大根持つて行くとか、うちではジャガイモ持つて行くとか、買わないように持つて行く。5品くらいのうち、1品は魚とかフライとか、そういうものは買うの。野菜で作ったものは、煮付けとか、持ち寄りだからさ。料理して折り詰めにして、こういうものだからって（社会福祉協議会の人に）見てもらって。

（お弁当作りのボランティアが12時頃に終わると）その後は、作る人たちがゆっくり慰労会みたいなものをやって、世間話をしたり、楽しいの！だから、今も毎日忙しいの！（笑）

■ 孫の優子さんより⁴

悔しくも、よしのさんは東日本大震災の津波で犠牲となってしまうた。「菖蒲田のおばあさん」として地域の人びとに親しまれていたよしのさんは、もちろん家族のみんなからも愛されており、実孫の優子さんにとっても誰よりも優しい大好きなおばあさんだった。母の輝子さんが役場に勤めていたこともあり、付添いや送迎などでよしのさんが親代わりに出て行くことも多かったが、「若いおばあさんだったので、よくお母さんに間違えられた」。

日頃から、内職をしながら音読をチェックしてくれたり、宿題を教えてくれたり、とても頼りになるおばあさんだった。優子さんをはじめ、孫たちが何か賞を受賞したり、学級委員やリレーの選手など何かの代表になったりすると、誰よりも一番喜んでくれた。そして、その話をお茶飲みの際には仲間内にとっても嬉しそうに話していたそうだ。

仲間たちと楽しく話をする一方で、よしのさんは「口の堅いおばあさん」として近所でも信頼されており、みんなの相談役であつたり、仲裁役であつたりもした。優子さんも就職してからはよしのさんに仕事での悩み事を相談したり、愚痴を聞いてもらったりすることもあつたが、そのようなときにもよしのさんは「黙って聞いてくれた」。

現在優子さんは結婚し、仙台市内で暮らしているが、週末や休日を利用して北上町にはしばしば帰省する。その度に「優子が好きだから…」とわらびの塩漬け、たけのこの煮物、お浸し、漬け物などをたくさん作って、孫の帰りを心待ちにしていたと言う。「喉が痛いときはカリン酒を出してくれたり、手作りの果実酒やドクダミ茶、赤紫蘇ジュース、梅干し、味噌…真似しようとしてもできない。おばあさんの作った梅干しがたべたいなあ」と優子さんは言う。

4 以下は、2014年5月26日 阿部優子さんへの聞き取りによる。



千葉家では私たちも何度も
食事のごちそうになった
2007年撮影

構成／武中桂

「保母さんになろうと思って

一生懸命勉強したのに…

役場に就職しました!」



昭和27年（1952）、追波^{おっぱ}集落生まれ、追波集落在住。千葉
よしのさんの娘である千葉輝子さんは追波集落で生まれ育った
が、「おじいさんに育てられた」というほどに、輝子さんのご
両親は仕事に邁進しており、その姿を見て育った¹。高校卒業
以降はずっと北上町役場（現在の石巻市役所北上総合支所）に
て勤務。イムスメ（婿養子をとった娘）のため、結婚後も追波
集落の実家にて暮らしていた。

■北上川を目の前に過ごした幼少時代

昭和30年（1955）から40年頃、北上町では男性は出稼ぎに行き、女性は石巻の水産
加工場などに働きに出ることが多かったが、千葉家では農業のみに従事し、両親共に出稼
ぎなどに出ることはなく特に農業外就労はしなかった。そのため、「両親は朝早くから夜

1 輝子さんの父（千葉
信男さん）の聞き書きは
『聞き書き』北上川河口
地域の人と暮らし 宮城
県石巻市北上町に生き
る』（48～59ページ）参
照、輝子さんの母（千葉
よしのさん）の聞き書き
は本書（42ページ～51
ページ）参照。

暗くなるまで働いてたから、働くので有名だったのね、本当に」というように、両親は常に忙しく、「おじいさんに育てられた」。

幼い頃は、よく屋外で遊んだ。

小さいときは、この辺の山に自分のすみかを見つけてね、自分の小屋を作って、漫画本とか何かを持ち込んで、そこで読みあさったり。あとはゴム跳びとか縄跳びとかおしくらまんじゅうとか。馬っ子跳びとか鬼ごつことかかくれんぼとか、ケンケンパ、ゴロッコ（ビー玉）、パッチ（メンコ）。とにかく外だね。

そしてその当時は、家の前には広大な田園風景が広がっていた。遊びの傍らで、薪取りなどは子どもたちの仕事であった。

私たちが小さいときは、山に遊びに行ったときに杉っぱって杉の枯れたやつを拾ってきて、それを火種にするの。もう少し大きくなると、裏山に行って木を取ってきて、かまどの薪とかお風呂の薪とか、小学校高学年とか中学生になってくると学校から帰って取ってくるのが、ある程度子どもたちの仕事だったのね。

輝子さんが子どもの頃、家の前は一面に渡って水田風景が広がっていた。

私が小さいとき、家の目の前は田んぼだったの。東北丸²で砂を吹いてから、こういう宅地になっ

² 東北丸は、東北地方建設局（現・国土交通省東北地方整備局）浚渫船として、昭和30年（1955）3月に北上川に配置され、浚渫を行ないその土砂を周囲に客土した。詳しくは、『聞き書き』北上川河口地域の人と暮らし 宮城県石巻市北上町に生きる』（37～40ページ）参照。

ただ、今よりも道路が低くて、家に石垣があるんだけど、それ半分埋まってるんですよ。ある程度の高さで石垣を積んでるはずんだけど、道路を高くしたから、道路そのものは高いように感じないんですけど、石垣が半分埋まるぐらいの高さなの。そして、ずっと低いところは田んぼだったの。田んぼがあったときには、ホテルも本当にきれいに見えたんだよ。

当時は、刈取り後の稲を川の堤防で干して乾かす様子も季節の風物詩であつた。

私が小さい頃には、川の堤防にハセガケ³してたの。たとえば、大沼⁴（の水田）から、そこまで持ってくるんだよ、リヤカーで。大沼ではハセつく場所がないからね、水に流されてしまうから。あとは、鴨に食われるとか。ここだったら、水に流される心配はないし、お国のものだし⁵。ハセを立てて、3段ぐらいしてたんだね。

■北上町役場に就職

輝子さんは、中学校までを北上町で過ごし、高校は石巻市内の女子高校に通った。その当時は、市内に下宿をしていた。卒業後、昭和46年（1971）に北上町役場に就職した。

何か職業をと思ったんだけど、親の後を継ぐつてのは頭になかったのね。親も継がせなくなかったでしょうけど。とりあえず保母さんにもなろうと思って、高校3年生のときにピアノ始めて、バイエル30番まで必死にやつて。とりあえず半年ぐらい習ったのかな。それで3月1日に卒業式で、3月8日に試験だったの、保母さんの。一生懸命やってたんだけど、帰って来たら、役場に入れる口があ

3 ハセと呼ばれる支柱に横竿を渡した棚に、稲刈り後の稲を束ねて掛けて乾燥させた。そのことをハセガケという。

4 大沼については、

『聞き書き』北上川河口地域の人と暮らし 宮城県石巻市北上町に生きる』（60～65ページ）参照。

5 北上川は一級河川で、河口周辺は国が管理している。



旧北上町役場
2004年2月撮影

るんだけどって言われてね、その当時だから。頭に
来たっちゃねえ、一生懸命勉強したのに。それで布
団かぶってね、怒って寝たんだけども、1時間後に
起きてね、役場に入るからって。それで次の日、3
月9日から役場に勤めました(笑)。

一旦臨時職員として役場に勤務し、2ヶ月
後には常勤職員として勤務するようになった。
輝子さんが就職した当時の北上町は「政争の
まち」⁶と呼ばれており、同年4月25日に県
議会議員選挙を控えていたこともあり、就職
してから2ヶ月後の5月9日まで休暇はな
かった。また当時の給料は、日給500円
ほどであった。

その当時、パンストが初めて出た頃で、1足
360円だったのね。それで、追波から月浜^{つきはま}まで
のバスが50円だったかなあ。今川焼が10円、ラー
メンとか焼きそばが50円とか100円とかの時代
だったんじゃないかなあ。

⁶ 当時の町長選挙では、
それぞれの候補者の支持
者が激しかった。爆弾騒
ぎがあったりと、地方紙
に大きく取り上げられた
こともある。



釣石神社

2005年2月撮影

■「楽しく遊ぶ」観音講

輝子さんは、婿養子をもらい、結婚後も実家で両親と同居している。こうした「婿養子をとった娘」のことを「イムスメ」と呼ぶ。イムスメであっても、結婚を機に観音講に入ること是不変ならないため、輝子さんも観音講に入った。輝子さんの親世代ではかなり厳しい規則に縛られていた観音講であったが、輝子さんたちの世代になるとその状況がいくらか緩やかになってきた。

お母さん（千葉よしのさん）たちの時代には、唯一の遊び場だったんだけど、厳しかったの。私たちの時代には、女の人のお祭りって感じで、年に2回は大威張りでお姑さんからも何からも解放されて、畑もなし、田んぼもなし、山もなし。早く言えば、その日1日楽しく遊んでくる。赤ちゃんも連れて行ってもいいし。釣石神社に寄って拝んだら、どこかに移動してね。泊まりで出かけた

年もあつたんだよ。楽しく遊ぶつてのが目的だから。

かつては「厳しい」ものであつた観音講も、時代の流れとともにその意味合いを変化させつつある。

■娘の優子さんより⁷

輝子さんは、東日本大震災発生時に北上総合支所に勤務しており、津波で犠牲となつた54名のうちの1名である。近年の輝子さんは、仕事の合間に自分の趣味を楽しんだり、家族や友人と旅行にでかけたり、休みの日には子どもや孫たちとの時間を楽しんだりしていた。特に2006年からは、輝子さんの夫である千葉五郎さんが「ヨシ門松」の製作を手がけるようになり、毎年季節になると一家総出で作業をした。地域の環境保全などにも熱心な五郎さんは、北上町内（曾呂^{そろ}美山^みのふもと）でのホタルの里づくりにも携わっていた。そのような夫の活動を、輝子さんは「大変だ」と言いながらも、楽しそうに手伝っていた。夏の夜には、五郎さんと一緒に水田にホタルを捕まえに行き、たくさん集めたホタルをホタルの里に放し、そこにたくさんさんのホタルが飛んだことをとても喜んでいた。

輝子さんは山登りが好きで、休みの日には友人と栗駒山に行ったり尾瀬に行ったりして趣味を楽しんでいた。娘の優子さんが小さかった頃には、近所の山で一緒にワラビを採ったり、タラの芽を採ったりもした。また、母であるよしのさんと同様に料理もとても上手で、「お母さんもおばあさんも、おいしいご飯の記憶と一緒に今も心の中で生きている」と優子さんは語る。

⁷ 以下は、2014年5月26日の阿部優子さんへの聞き取りより。

⁸ 千葉五郎さんが考案した北上町特産のヨシを利用して作られた門松。



集落における女性の組織

—観音講と念仏講

■ 嫁が参加する組織—観音講

北上町の女性、とりわけ50歳以降の女性たちに、「北上町の女性の生活について教えてくたさい」と聞くと、決まって出てくるのが「観音講」の話である。

「観音講」は、村落社会における女性、特に嫁が参加する組織として理解されている。北上町史に、「観音講」について次のような記述がある。

「嫁たちの講で三月、十月の十七日を講の日とし、廻り番の宿に集まり精進料理で会食する。近くの観音堂や山の神供養塔を参拝し、時には小牛田の山神社¹に代参入を立てていた。大室では『オナゴ』契約といい、嫁いでくると姑と交替して仲間入りをした。二月と十月の二十四日が講の日で一日仕事を休み宿に集まり会食

する。初めて加入した人が一人ずつ参拝に行っていた」（北上町504）

集落において、開催日や執り行われ方、名称に違いはあるが、基本的には、特定の日に、集落の嫁が集まって食事をとる親睦の場であり、加えて安産祈願の場でもあった。

「観音講」は、年に2回開催され、参加者は、その日丸一日、観音講に費やすことになる。嫁が嫁いでくると、姑と交代することになるが、嫁がない場合は、決まった年齢で引退する。

そのことを「アガル」という。集落によつてその年齢は異なるが、だいたい45歳くらいである。開催場所は、地域の中の大きな家で開催されたり、地域の集会所を利用したりと集落によつてさまざまである。現在、50歳代の女性を中心となつて取り仕切るようになった頃から、「移動」といって、温泉や観光名所に行つて行われるようになり、親睦の意味合いが強くなつていった。移動が行われる前の観音講では、昼（朝の遅い段階）と夜にお膳が準備される。お膳は精進

¹ 伐木、炭焼きなどの山仕事に従事する人びと・鉱山労働者や猟師などの守謙神であるほかに安産を司る神としても信仰されている。山の神は男神、女神、あるいは夫婦神とも伝承されている。遠田郡子牛田町に鎮座する山神社は県下一円を信仰圏としている（北上町437）

料理であり、その内容は、集落で代々受け継がれてきた。その場を取り仕切る役割が組（1集落は3〜5組に分かれている）ごとの当番制で行われ、当番となった組のことを「テエマエ（宿前・頭前）」とよぶ。「テエマエ」は、ゴザを敷いたり、座布団を準備したりと、料理だけではなく、場全体を取り仕切る。

特徴的な料理として、この地域では「シャヤ」「サラ」といったクルミ和えが出される。この料理は、葬式や法事などでも出され、観音講は、この料理の作り方を学ぶ場でもあった。

観音講では、年長者を「トシダカ」（地域によつては「デンボサン」とよぶ。「トシダカ」を頂点とした上の世代の人たちの、下の世代へのかかわり方は大変厳しく、礼の仕方にはじまり、観音講の最中の私語や行動など、厳しく制限するものであった。初めて観音講に参加する人を「ハツデキ」といい、「ハツデキ」は、みんなの前で歌を披露しなければならず、「それが苦痛であった」と多くの人たちは振り返る。

そこには、歌を歌うことの「恥ずかしさ」以外に、それを厳しく見定める「トシダカ」の存在があった。

観音講への参加は義務であり、不幸があつた場合を除いて、基本的には不参加は認められていなかった。着物を着なければならず、昼には昼のもの（袂たもと）を、夜には夜のもの（元禄）を着ての参加であつた。妊娠中であっても着物を着ることが求められたほどであり、この点からも規律の厳しさがうかがえる。

「観音講」では、安産祈願が行われる。観音様の掛け軸や山の神様の掛け軸をみんなで拝み、観音様や神様にささげたお膳は、出産予定の女性に配られる。北上町史に、安産祈願として次のような記述がある。「お産の守護神は山の神であるとき、ムラの山の神社や鎮守社などに安産祈願に行き、奉納されている「オマクラ」（枕）を借りてきて自宅の神棚に供えておき、無事出産がすむとオマクラを二つ持ってお礼参りをする」（北上町436）。このような

行為は、観音講を通して行われていた。

お金を使う機会もあまりなく、年から年中、農作業に明け暮れていた北上町の女性にとつては、観音講は厳しいとはいえず、数少ない親睦の場であり、楽しみのある場、みんなに会える場でもあった。また、集落に嫁いだ女性にとつては、挨拶の仕方を教わる場、地域の人たちとの顔合わせの場、郷土料理を教えてもらう場でもあった。

■ 姑が参加する組織―念仏講

村落における女性の組織として、「観音講」のほかに「念仏講」がある。北上町史には、女川集落の念仏講について書かれている。「女川の念仏講は老婆たちによって組織され、春秋の彼岸、盆、成道会などに寺に集まり念仏をする。太鼓、鉦に合わせて百万泌の数珠を廻している」。

このように、念仏講は、高齢女性の参加する組織として理解されている。実際のところは、一家から女性が1人参加することが義務づ

けられており、姑世代が不在の場合は、嫁世代であっても参加する。念仏講では、集落の中の家々からの参加によって祖先の霊を弔うことが目的とされており、先の北上町史の記述にもあったように、数珠や太鼓を用いて、弔いの儀式が行われる。念仏講でも、観音講と同じように共同飲食を伴うが、観音講のような「厳しさ」はあまり聞かれない。

参加者が、嫁時代のように姑の存在や、家に帰ってからの家族の食事やお風呂などの支度を気にしなくても構わない、姑世代であったことから、気兼ねなく、酒飲みが行われた。酔っ払って歩けなくなるような人たちもおおり、北上町の高齢の女性たちにとって、息抜きの場でもある。

文／庄司知恵子

【参考文献】

『北上町史 自然生活編』
北上町、2005年

あとがき

今年2014年は、私たちが北上町に通わせていただくようになってからちょうど10年目に当たります。北上川河口地域研究グループとして、社会学を中心として複数の研究者・大学院生が入れ替わりもありますが長いお付き合いをさせていただいています。

2004年当時は、北上川河口地域でのヨシ（葦）の利用に注目し、そのことを学び、地域についてたいへん多くのことを勉強させていただきました。そして調査をさせていただくということだけではなく、北上町自体や地域のみなさまと幅広くかわりを持たせていただき、いつのまにかその魅力にすっかり惹きつけられてしまいました。

2007年には、地域のみなさま、たいへんお世話になつていらっしゃる方々に少しでも恩返ししたい、何らかのかたちで伺ったお話を残したいと思い、橋浦地区の方々を中心にそれまで伺ってきたみなさまのお話をまとめた『聞き書き 北上川河口地域のひと暮らし——宮城県石巻市北上町に生きる』を刊行しました。私たちの力不足で地域の魅力を十分に伝え切れていませんし、載せることのできなかった魅力的なお話がたくさん残りました。

その中でとくに心残りだったのが、女性のみなさまから伺ったたくさんのお話です。私たちは調査の初期はおもに地域のことにお詳しい男性にばかりお話を伺っていました。ところが調査を進めるうちに、その傍らに寄り添っておられる奥様やお母様のお話もたいへん興味深く、その女性ならではの視点や暮らしに対するまなざしが、北上町を理解しその魅力を広く伝えようとするうえで必要不可欠であることに気づかされました。そこで私たちは、研究グループの1人の武中桂を中心として、昔の

ことや現在の生活についてたいへん気さくに、にぎやかで温かなおしゃべりの時間を持たせていただきました。みなさまに伺ったお話はどれも面白く、また新しい発見が尽きず、私たちは夢中で書き留めさせていただきましたが、私たちの怠慢と力不足でまとめる機会も持てないまま時間が経過してしまいました。

ところが2011年3月11日に東日本大震災が発生し、これまでの調査を中断し、北上町の今とこれからのためにも何かできないかと、研究グループに新しいメンバーを迎えながら復興のお手伝いを模索してきました。そのなかで、これまで伺ってきたお話が「未来に向かっていく」ための手掛かりとなるのではないかと考えるようになりました。大震災の過去と現在とでは、女性のみなさまのライフスタイルも様変わりしています。過去のお話を伺って時間を「過去に戻す」というのではなく、北上町のこれからや未来について考える参考にならないかと思い、あらためて聞き書き集の続編の刊行に取り組むことにしました。

この冊子にご登場いただいたみなさま、大槻トヨさま、千葉みや子さま、鈴木昭子さまには、何度も繰り返し貴重な時間をとっていただき、さまざまなお話をしていただきました。また、千葉よしのさま、千葉輝子さまにはご家族の千葉五郎さま、優子さまに多大なご理解とご協力をいただき、お話を掲載させていただくことにご理解をいただきました。また私たちがこの冊子でまとめることができたのは、北上町の女性のみなさまに伺ったお話のほんの一部にすぎません。その他にも、多くのみなさまにお話を伺っています。お名前を挙げることは控えさせていただきますが、お話を聞かせていただいたすべてのみなさまに深く感謝申し上げます。

なおこの冊子は、北上川河口地域研究グループのうち次の3名が中心に作成しました（肩書は現在のものです）。

武中桂（神戸女学院大学人間科学部特任助教）

庄司知恵子（岩手県立大学社会福祉学部講師）

平川全機（北海道大学大学院農学研究院札幌サテライト研究員）

この冊子は前作同様、分担してそれぞれのパートを作成し、相互にチェックしあい、さらにそれをご本人やご家族の皆様にチェックしていただきながら作成しました。もちろん最終的な責任は私たちにあります。この冊子が、地域のみなさまにわずかでもお役に立てることがあれば、これに勝る喜びはありません。

平川全機

編集／平川 全機・武中 桂・庄司 知恵子

文・構成／武中 桂・庄司 知恵子

写真／平川 全機・宮内 泰介・武中 桂・庄司 知恵子

写真提供／阿部 優子（42 ページ、52 ページ）・鈴木 昭子（35 ページ）

装丁・本文デザイン・DTP／平川 全機

【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし 2 宮城県石巻市北上町の女性たち

発行日 2014 年 9 月 1 日

編 者 北上川河口地域研究グループ

発行者 北上川河口地域研究グループ

〒 102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1 法政大学人間環境学部西城戸誠研究室

〒 060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 7 丁目 北海道大学大学院文学研究科宮内泰介研究室

本冊子はニッセイ財団環境問題研究助成平成 25 年度学際的総合研究「生業の創出を核とした地域社会の回復力を形成する——宮城県石巻市北上町（橋浦地区ならびに十三浜地区）の被災経験から」（研究代表者：西城戸誠 法政大学人間環境学部教授）の支援を受けて作成された。